

近隣の専門病院と提携し、 IVR主体の クリニックを開業

六甲道たかやすクリニック院長
高安幸生氏

放射線科医が画像診断を専門として独立開業することは、最近では珍しくなくなりました。しかしIVRでの開業となると血管造影装置などの高価な設備機器、看護師、放射線技師などのスタッフ、入院病床が必要になることから、たいへん難しいとされる。そんな中、日本で初めてIVR専門のクリニックとして2002年12月にオープンしたのが神戸の「六甲道たかやすクリニック」である。

開業1年半で黒字

院長の高安幸生氏は、神戸大学を卒業後、兵庫医科大学で助教授を務め、IVRを駆使した臨床腫瘍学、特に肝臓ガン等の動脈化学療法では国内有数のプロフェッショナルとして知られる。

「独立開業を決めたのは患者さんのため、IVRを用いて自分なりのスタイルで放射線医療を実践したいと思ったから。ただ、徒手空拳の私にとってイニシャルコストの問題はやはり大きかったですね。最先端のモダリティをそろえることは難しく、そこで考えたのが、以前から知り

合いだった近くの民間病院と提携すること。そこに、開放型病床を用意してもらい、またIVRに必要な設備なども私の希望に沿って整備してもらったのです」
入院が必要な患者はこの病院に送り、自ら出向いてIVRを施術するだけでなく、主治医として患者をベッドサイドで診療する。歩いて1分の距離だから、ほとんど支障はない。IVR適応患者の入院は1泊のみの短期からターミナルケアまで。また、開放病床を持たない別の病院とも契約し、専門外来診療と、必要に応じ入院患者のIVRを行っている。高安氏は毎日、こうした提携病院の回診やIVRを終えてから、クリニックでの診療を行っているのだ。

クリニック自体は、開業から1年半でほぼ黒字にこぎつけた。しかし、IVR主体での経営はなかなか難しいのが実情という。

「まず、診療保険制度において開放型病床の利用は点数が低く、「開放型病院共同指導料」(350点)しか算定できません。そのため、提携病院とは非常勤医師の契約としています。また、他からの

紹介ルートの確保も大きな課題です。大病院や大病院ほどプライドや体面があって、うちのようないクリニックへ積極的に紹介してくるケースは少ないのです」
それでも、これまで築いた各方面のネットワークにより、難しいIVR案件の紹介や出張IVRの依頼は着実に増えてきている。

研修希望者はいつでも歓迎

豪放磊落、野武士のような雰囲気を漂わせる高安氏だが、開業によって自分のやりたい放射線医療をめざせることは非常にやり甲斐があると強調する。

「とりあえず、このクリニックを軌道にのせることに全力をあげていますが、今後は自分が培ったIVRの技術を若い人たちに積極的に伝えていきたいと思っています。実は先日、台湾の2つの大学から呼ばれて講演と手術ライブをしたところ。研修希望者は、いつでも歓迎します」

IVR開業という、日本の放射線科医の新しい可能性を切り開きつつある高安



六甲道たかやすクリニック院長 高安 幸生氏

【資料5】IVRの分類

血管性 IVR	血管形成術 (PTA)	バルーンカテーテルの開発で急速に発展。治療対象は冠動脈、腎動脈、四肢動脈のほか、静脈系にも拡大。最近ではレーザー治療との組み合わせ、アテレクトミーなどの開発も。
	血管塞栓術	消化管出血の止血や肝細胞ガン治療、食道胃静脈瘤塞栓術など。
	局所薬剤注入	血管カテーテルを通じて薬剤を病変部周囲の動脈に選択的に注入する。ガンの動注化学療法が中心だが、動脈塞栓症の治療も。
	その他	肺塞栓症予防としての下大静脈フィルター留置など。
非血管性 IVR	生検	肺、リンパ節などの生検。
	吸引・排液 (ドレナージ)	
	狭窄拡張 注入療法	胆道、尿路系の狭窄、閉塞の拡張術。

氏。その行方にはまだまだ困難もあるだろうが、ぜひ成功させてもらいたい。